

奈良・平安時代における東総の諸生産

糸川道行

はじめに

筆者は下総国における奈良・平安時代集落研究の一環として、これまでに『和名類聚抄』（以下『和名抄』）にみえる下総国匝瑳郡・海上郡・香取郡（以下、東総三郡）を対象として考察してきた。まず東総三郡および一部その周辺の郡の各郷について比定地を検討し、奈良・平安時代遺跡の所属郷を想定した（糸川2020）。次にそれを基礎として、東総における奈良・平安時代の交通（糸川2021a）や、東総三郡の各郡郷間の関係・郡家の比定地（糸川2021b）、各郷の主要集落等（糸川2022）について述べた。

その後、続きとして生産・生業に着目した。奈良・平安時代においても、通常、米生産が主体であったことはいうまでもない。米生産についてはあまりにも大きなテーマであるため筆者の力量ではとりあげることができない。

また奈良・平安時代における米作以外の生業・生産では鉄生産が考古学上、大きな比重を占める。それは鉄生産が遺構・遺物ともにほかの生産物と比べて遺存しやすいことによるが、それだけでなく鉄生産がほかの生産・生業を支える基幹的なものであったことにもよる。この鉄生産については東総三郡に下総国埴生郡や上総国武射郡等を加えてその様相を調べたが、紙数

が多くなったため別稿で述べる予定である。

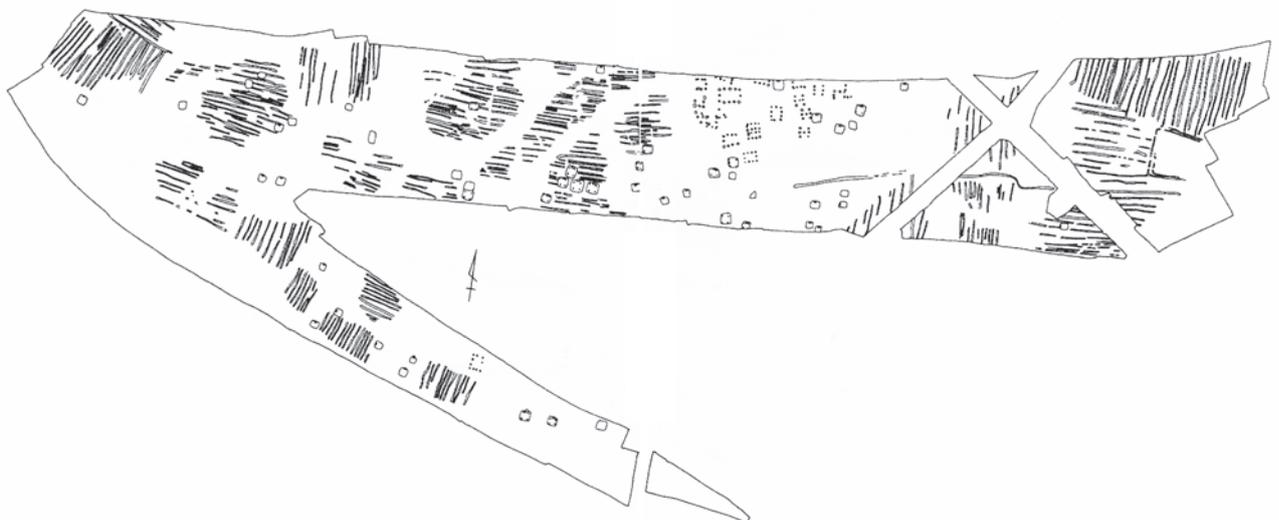
本稿では米生産・鉄生産以外の諸生産をとりあげる。なお本稿では単に東総と記述する場合、匝瑳郡・海上郡・香取郡の一郡以上を指す。

1 畑作

○芝崎遺跡群（道澤2006）

芝崎遺跡群芝崎遺跡・中島遺跡は横芝光町（旧光町）芝崎に所在する。太平洋に注ぐ栗山川の左岸で、九十九里平野の微高地に立地する。幾列か存在する九十九里平野の海岸砂堤帯のなかでは、台地に近いところである。匝瑳郡石室郷内の遺跡群である。奈良・平安時代の畑・竪穴建物・掘立柱建物が多く見つかった大規模な集落遺跡である。

畑跡は、芝崎遺跡では約4万㎡、中島遺跡では約3,000㎡見つかった。その様相について、本稿では一例として芝崎遺跡5期（9世紀前半）の遺構分布図を報告書から転載した（第1図）。このような大規模の畑跡が見つかったのは、千葉県内では芝崎遺跡群のほかにはない。これは畑跡の遺存が良いという条件に恵まれたこともあるが、それだけではなく道澤明をはじめとした調査担当者の発掘技術の高さによるものと評価できる。



第1図 芝崎遺跡5期（9世紀前半）の遺構分布図（S=1/2,000）（道澤ほか2006報告書から改図転載）

畑作物は陸稲が多いが、イネ属のほかにはヒエ・アワのプラントオパールも検出されている。そのほかの種類は不明である。

筆者の管見の範囲内で他遺跡の事例をみると、古墳時代の事例であるが、千葉市椎名崎古墳群SX-4の墳丘下で畝状遺構が見つかった（小高1988）。また四街道市稲荷塚遺跡では畑跡は見つっていないが、出土した炭化物が分析によりイネとアワであることが判明した（佐々木ほか2009）。アワについては台地上の畑作である。

芝崎遺跡群で大規模な畑跡が見つかった理由として、道澤は急激な人口増加や東国（関東）への開発があったことを考察している。逆瑳郡が18郷に及ぶ大郡であることから、道澤の指摘どおり、人口増加は顕著であるとみる。また関東への開発については、逆瑳郡の場合、台地上も盛んであったが、奈良・平安時代には海浜部の開発が進展した。芝崎遺跡群は逆瑳郡におけるそのような動向のなかで営まれた集落である。

本稿では畑作の代表例として、芝崎遺跡群をとりあげたが、畑作については米作同様にほかの集落においても日常的なものである。しかし芝崎遺跡群の畑作はほかの集落と比べても大規模とみる。かつて筆者は芝崎遺跡・中島遺跡について郷家集落である可能性を述べた（糸川2022）。生産という面からみても石室郷の主要集落としてふさわしい内容をもつ集落である。

2 土器生産

(1) 土師器生産

○織幡妙見堂遺跡（中野・處1989、平野・平井1994）

香取市（旧小見川町）織幡に所在する。香取のうみに注ぐ小野川上流の支谷に、北方の一部を除いて囲まれた台地上に立地する。香取郡大槻郷内の遺跡である。9世紀末から10（11?）世紀代にかけて土師器生産を行った集落である。土師器焼成坑39基・ロクロピットを有する竪穴工房4棟・廃棄土坑1基・粘土ピット2基¹⁾・粘土探掘坑11か所・掘立柱建物4棟・竪穴建物104棟が見つかった。なお土師器生産に関わる時期を9世紀後半からとすると、それ以降の竪穴建物の数量は42棟である²⁾。

中野修秀は本遺跡の土師器生産体制について、報告書中で詳細な考察を行っている。中野は周囲の集落・地域から燃料、鉄製品・地金、混和材などの提供を受け、また物品だけでなく、労働力の提供があったことを想定した。逆に本遺跡から織幡カジ山第Ⅱ遺跡に対

して、土師器生産の技術供与があったことを指摘した。中野はまた粘土の採掘量が膨大であることなどにより、本遺跡で生産された土師器は周囲の寺社や集落に供給されており、特に近隣に所在する香取神宮や木内廃寺が大手の消費先候補であると考察した。本遺跡の土師器生産の経営はこれらの有力な寺社が担った可能性が高い。

笹生衛は香取神宮周辺の集落を素材として、神郡である香取郡の神仏関係を考察した（笹生2012）。笹生はその一つである本遺跡に言及し、8世紀代から11世紀代にわたる寺院集落として位置づけ、なかでも山林修行の場としての性格を指摘した。また墨書土器の様相から有力な寺院集落である多田寺台遺跡との共通性を指摘し、本遺跡の経営にあたったのは多田寺台遺跡と同様に中臣部氏の一族と考察した。この笹生の考察により、土師器焼成遺構を管掌したのも中臣部氏とみる。笹生はまた本遺跡の土器生産集落の形成と集落規模の拡大については、「大禰宜家による山林開発や私領織幡村の形成と密接に関連している」と考察した。本遺跡では11世紀代においても銅製化仏などの仏教的な遺物が出土しており、笹生によって中世へ連続する様相が指摘されている。

本遺跡や多田寺台遺跡・多田日向遺跡（戸村1997・1998）にみられる寺院集落としての様相についてはそれだけで一大テーマであり、本小考で深く追求することはできなかった。また本遺跡は古代末における集落の変容といった面からもとりあげるべき遺跡である。

(2) 須恵器生産

○八辺窯跡（土屋1983）

匝瑳市（旧八日市場市）八辺に所在する。栗山川支流の借当川流域の南側に位置する。逆瑳郡山上郷内の遺跡である。見つかった窯跡は1基で、偶然発見されたものである。借当川の低地から延びる支谷を西に臨む斜面に立地する。遺物は土屋潤一郎によって須恵器杯蓋・杯・有台杯が紹介された。その特徴から歴年代は8世紀第3四半期頃とみる。

○鶴舞窯跡群³⁾

多古町原に所在する。栗山川の支流により開析された斜面に立地するとみるが、不明瞭である。逆瑳郡原郷内の遺跡である。消滅しており、詳細は不明である。「土師器」の出土が伝えられている。消滅の記録があることから、破壊されたのは須恵器窯跡であり、「土師器」は褐色の色調を呈する須恵器とみる⁴⁾。

3 瓦生産

○龍正院瓦窯および龍正院出土の瓦（須田1998）

成田市（旧下総町）滑川に所在する。旧鬼怒川水系の低地に面する台地上に立地する。香取郡磯部郷内の遺跡である。瓦窯3基が見つかった。出土した遺物は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、土師器甕・高杯・有台杯である。軒丸瓦は三重圏文縁単弁八葉蓮華文、宝相華文、軒平瓦は型引き三重弧文、均整唐草文、宝相華文の瓦当文様をもつ。平瓦には凸面格子叩き、平行叩き、縄叩き文がある。龍角寺系の瓦が出土しているが、瓦は龍角寺よりも後出するものである。龍角寺の創建は7世紀後葉とみられることから、本瓦窯はそれよりも後出する。瓦は龍正院の前身の龍正院廃寺に供給されたものである。瓦の同伴関係をみると、軒丸瓦は名木鎌部廃寺、軒平瓦は木内廃寺と同范である。また宝相華文は下総国分寺と同文であり、国分寺との関連がうかがえる。

○清水入瓦窯（鬼澤2008・2010・2011・香取市2008）および木内廃寺出土の瓦（山路1998）

清水入瓦窯は香取市（旧小見川町）小見川に所在する。黒部川沖積地の北西側支谷に向かって南に下る斜面に立地する。下総国海上郡城上（城内）郷内の遺跡である。香取市の重要遺跡確認調査により、瓦窯2基・瓦出土集中地点1か所・竪穴建物3棟などが見つかった。瓦集中地点は1・2号窯とは別窯の灰原とみられ、窯は3基以上存在する可能性が高い。瓦は平瓦と丸瓦が大半で、鬘斗瓦や面戸瓦も出土した。これらの瓦は東1kmに所在する木内廃寺に供給されたものである。

木内廃寺は香取市（旧小見川町）木内に所在する。香取のうみ（現利根川）に注ぐ黒部川流域の低地を南東に臨む台地上に立地する。城上（城内）郷内の遺跡である。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅切り瓦などが出土した。軒丸瓦の瓦当文様には、素弁八葉蓮華文、素文縁素弁六葉蓮華文、素文縁単弁十六葉蓮華文がある。軒平瓦の瓦当文様には、三重弧文、均整唐草文、蓮華文がある。三重弧文の瓦の顎は段顎である。木内廃寺の瓦について、山路直充は八日市場大寺廃寺の影響を受けていることから、造営に逆瑳郡が関わると考察し、また東総三郡間の密接な関係を指摘した。さらに蓮華文軒平瓦の包み込み技法が下総国分寺にみられることから、国分寺とのかかわりについても言及した。なお山路は木内廃寺の創建年代について岡本東三の7世紀第4四半期という説（岡本1993）を保留し、慎重な姿勢を示している。

○離山瓦窯製鉄遺跡（千葉県文化財センター1998）

旭市（旧干潟町）鍋木に所在する。逆瑳郡珠浦郷内の遺跡である。『分布地図（2）』に瓦の出土が記載されている。遺跡名からは瓦窯と製鉄が同一地点で行われた遺跡となるのだろうが、詳細は不明である。一部消滅している。『干潟町史』（干潟町1975）に、「鍋木にはその瓦（筆者補注…八日市場大寺の瓦）を焼いたと思われる場所があったと伝えられ」との記述があるが、この遺跡のことかもしれない。

○コジヤ遺跡（斎木1987・1998a）出土瓦の焼成瓦窯およびコジヤ遺跡周辺遺跡

コジヤ遺跡は香取市（旧栗源町）に所在する。栗山川上流から東方に延びる支谷を北方に臨む台地上に立地する。逆瑳郡田部郷内の遺跡である。単弁八葉蓮華文軒丸瓦の瓦当范や平瓦が出土した。瓦当范の文様は山田寺系軒丸瓦の流れをくむものであるが、珠文をもつ小振りなものであり、時期的には初期寺院よりも下るものである。本遺跡では寺の建物遺構が見つからないが、近隣に存在するとみる。

岩部遺跡（平岡1978・斎木1998b・越川1995）・岩部城遺跡（高木ほか1978）はコジヤ遺跡の南西2kmに位置する集落遺跡である。岩部城遺跡は岩部遺跡に包括される遺跡である。9世紀後半の竪穴建物1棟のカマド煙道部から完形の丸瓦が出土した。これまでも平瓦が多く表採されている。岩部遺跡近隣の安興寺文書に「寛政年間に妙見山より花型丸瓦多量に出土」の記載がある（高木ほか1978）。

コジヤ遺跡北西方近隣の岩部大関遺跡も集落遺跡であり、平瓦が出土した。またコジヤ遺跡西方3kmに位置する根崎遺跡でも軒丸瓦が出土した。以上は逆瑳郡田部郷内の遺跡である。

コジヤ遺跡の瓦は近隣に所在する未発見の瓦窯で焼成された可能性が高い。周囲の遺跡から出土した瓦についてもその可能性があるのかもしれないが、断定しがたい。しかし初期寺院から降る時期にコジヤ遺跡周辺に寺をもつ歴史的環境があったことはいえる。なおこの寺について山路直充は岩部廃寺としている（山路ほか1994）。

4 布生産

○正倉院調庸綾布墨書銘文

正倉院宝物のひとつに調庸綾布墨書銘文がある。そのなかに逆瑳郡石室郷から献上された麻布の銘文が2点ある。1点は「下総国逆瑳郡磐室郷戸主大伴部麻

呂戸口大伴マ足輪調庸并一端 天平十三年十月」、もう1点は「□逆瑳郡磐室郷大伴部足輪調庸并一端」と記されたものである(千葉県1996)。磐室郷は『和名抄』にある石室郷のことである。石室郷において布生産が行われており、大伴部氏が関わっていたことがわかる資料である。道澤明はこの墨書銘文から、石室郷が布の生産地のひとつであり、逆瑳郡が良質な布の産地であることを考察している(道澤2010)。

下総国内では逆瑳郡石室郷のほかに、相馬郡大井郷から納められた庸布の墨書銘文が2点ある(千葉県1996)。石室郷や大井郷は良質な布産地であった可能性があるが、布は石室郷や大井郷だけではなく、下総国内の多くの郡郷で生産され、そのうちの一部分が調庸布として京進されたとみる。

調庸布進上墨書銘文は上総国の方が下総国よりも多い。詳細は省くが郡郷名だけ以下に記す。

平群郡大里郷(上総国または安房国) 朝夷郡満祿郷 長狭郡酒井郷 長柄郷または長狭郡 市原郡海部郷 市原郡 周准郡額部郷 周准郡藤部郷 周准郡武射郡長倉郷 天羽郡三宅郷 天羽郡宇部郷

また確実な安房国の事例として平群郡白浜郷のものがある(以上 千葉県1996)。

上総国望陀郡から献上された望陀布は道澤ほか多くの研究者が指摘するとおり格別高級な麻布である。なかでも井口崇の研究は房総における今後の布生産研究の指針となるものである(井口2022)。井口は望陀布の素材は苧麻からむしであり、布密度が非常に細かい極上の苧麻布と指摘した。さらに『日本書紀』孝徳紀大化二年正月条の記載にみえる「贄布さよふ」に相当するものと考察した。

房総の調庸布進上墨書銘文は、広範に生産された房総の布生産を物的に裏付ける資料である。またこれらの墨書銘文は、8世紀前半から9世紀前半における調庸布生産が郷以下、戸レベルの個別生産であったことを示す資料でもある(古尾谷2020)。

5 水産物・漁撈活動

○平城宮出土贄荷札木簡

平城宮内裏北方官衙地区第13次発掘調査において、SK820から出土した荷札木簡のひとつに「下総国海上郡酢水浦若海藻 御贄 太伍斤中□」と記されたものがある(第2図)(木簡学会編1990)。これは奈良時代に下総国海上郡の特産物として、「若海藻」が朝廷に献上されたことを示す文書である。「酢水浦」は産地

名である。「太伍斤たいごきん」は重さを示し、今の約3.4kgである。「中」は品質の等級である。この木簡は下端にのみ切り込みがある比較的珍しい形態のものとして指摘されている(奈良文化財研究所(以下奈文研)2007)。また、「酢水浦」については奈文研2007文献において「すみずのうら」と読まれている。

「酢水」が「すみず」とすると、後世には「清水」に転訛した可能性が高い。あるいは本来、当地では「しみず」と称していたが、東国の方言により平城宮には「すみず」と伝わった可能性がある。

古代の下総国海上郡内で、水域環境をもつ現在の市町の地名のなかに「清水」が存在しないか『角川日本地名大辞典』(以下『地名辞典』竹内編1984)等で調べてみた。その結果、銚子市清水町、東庄町羽計字清水、旭市(旧海上町)蛇園出清水地区の3か所を見つけることができた。これら3か所のうち、もっとも有力であるのは太平洋に近い銚子市清水町である。旭市蛇園は太平洋から遠く、また「出清水」が『地名辞典』にみられないことから、このなかではもっとも可能性が低いとみる。なお古代の東庄町域においてワカメが採取できたかどうか筆者にはわからない。銚子の清水町・清水は大字・小字の地名であることから「酢水浦」にもっともふさわしい地名である。

ところで「酢水浦若海藻」は奈文研2007文献が指摘するとおり、下総国海上郡でとれる特産ワカメのブランド名である。その場合、もしも「酢水浦」以外でとれるワカメがあったとしても「酢水浦」産と称することはあり得る。しかしそうであったとしても、現在の銚子市清水町周辺が海上郡におけるワカメ京進の中心地とみる。

清水町は奈良・平安時代においては海上郡三前郷内である。下総国海上郡では、三前郷を主体としてワカ



第2図 「酢水浦若海藻」木簡(木簡学会編1990『日本古代木簡選』平城宮跡 贄の荷札(二)から転載)

メが採取された。採取したワカメは城上（城内）郷に所在する海上郡家に集積されたとみる。

また今泉隆雄はこの木簡の文字が「国衙様書風」であることから、荷札は国衙で書かれたと考察した（今泉1998）。このことから、海上郡家に集積されたワカメはさらに下総国府に集積されて荷札が作成されたか、あるいは国の役人が郡家に赴いて荷札を作成したかのどちらかとみることができる。

なお常陸国関係の贄貢進木簡の一つに、「常陸国那賀郡酒烈埼所生若海藻」というものがある。今泉はこの荷札も国衙様書風であるとしている。以上から東国産のワカメは概して国衙に集積された可能性がある。あるいはワカメは東国産に限らず、一般に国衙に集積されるものであったのかもしれない。

○津宮遺跡群（黒沢2004）

香取市津宮遺跡群は根本川下流で北側に香取のうみが広がる自然堤防上に立地する。見つかった奈良・平安時代の竪穴建物は35棟であるが、調査地は自然堤防上の一部であり、建物はより多く存在することが確実である。奈良時代のものは2棟と少ない。平安時代のものが33棟と主体を占め、黒沢哲郎は10世紀代が多いと考察している。11世紀以降、住居は掘立柱建物や平地建物に移行するとみるが、その明瞭な把握は難しい。

津宮遺跡群からは管状土錘・有溝土錘が316点、土玉が7点と漁網錘関係の遺物が多量に出土した。管状・有溝土錘は竪穴建物からはあまり多く出土していないが、使用された時期は、竪穴建物群の主要年代である10世紀およびそれ以降とみる。

笹生衛は津宮遺跡群について香取のうみでの漁撈活動に基盤を置いた漁撈集落の展開と考察した（笹生2012）。なお土錘については佐々木義則が茨城県の集落を対象として詳細な考察を行っている（佐々木2016・2020・2021）。

漁撈活動についても先述した畑作と同様に、香取のうみや九十九里浜などに近い集落では普遍的に行われたとみることは当然のことである。その様相については土錘等の出土遺物から今後、下総国においても考古学的に深めていく必要がある。

6 製塩

東総三郡だけでなく、下総国では製塩遺跡が見つからない。しかし人が生きていくためには塩分の摂取が不可欠である。また古墳時代に渡来した馬については、奈良・平安時代において官牧の設置にみられ

るように、輸送・伝達用、戦闘用、儀礼用、農耕用などでさらにその重要性は増大した。馬および牛の飼育においては大量の塩が必要である⁵⁾。たとえ製塩遺跡が見つからないとしても、奈良・平安時代の下総において塩が流通していたことは確実である。

房総における製塩については、神野信がとりあげている（神野2004）。南房総市（旧白浜町）沢辺遺跡は太平洋の海岸段丘上に立地する遺跡である。神野は沢辺遺跡から出土した「平底鍋形土器」を製塩土器とし、9世紀代の安房国で製塩が行われていたことを明らかにした。そして技術的な系譜としては、松島湾沿岸など東北地方南部地域と関係があると考察した。

製塩には、土器以外とみられる製品も使用された。9世紀中葉の事例であるが、『平安遺文』には筑前国志摩郡大領の肥公五百磨が大宰府に隣接する観世音寺に煎塩釜一口を返送したという記録がみえる⁶⁾。この件をとりあげた森公章は肥君一族による製塩、あるいは郡家で製塩が行われたと考察した（森2013）。この塩釜はおそらく鉄製品であり、遺存しにくいものとみる。

製塩土器については今後も安房国の海岸地帯では発見される可能性が高いが、これまでのところ両総では確認されていない。手捏土器的であるため、製塩土器と認定しがたい事情もある。しかし両総においては普遍的な存在ではないとみる。このような状況のなか、坂本和俊は土器を使わない製塩法に言及した（坂本2015）。

『常陸国風土記』信太郡条には「塩を火きて業を為す」、同行方郡条にも「塩焼く藻」という記載があり、香取のうみに面する「浮島の村」などで製塩が行われていたことがわかる。坂本はこの記載に注目し、常陸国南部において土器を使わない製塩が8世紀初頭には存在したと考察した。これは海水に漬けたアマモを乾燥させて焼き、その灰を丸めて「おむすび」とするという方法である。坂本はその裏付けとしてインドネシア内陸部の民俗例を紹介した。これは塩分の高い温泉に行き、樹皮に塩分を何度も染み込ませた後に焼き、その灰を丸めて持ち帰るといったものである。この方法であれば、塩分濃度の高い温泉をもつ日本の内陸部でも製塩が可能である。しかしこの方法の場合、物証が残りにくいいため製塩遺跡の把握が難しい。内陸部での土器を使わない製塩遺跡の発見は今後の検討課題である。

茨城県北部では日立市金木場遺跡などで製塩土器が

出土しており、常陸国北部では製塩土器を使用した製塩法が存在した。この分布は福島県まで続き、さらには前記の松島湾沿岸地域にまでつながる可能性が高い。このようにみると、沢辺遺跡の技術系譜も松島湾沿岸地域だけでなく、ひろく常陸国北部・陸奥国南部とみताほうが妥当である。

坂本はまた穿孔貝の巢穴痕跡をもつ被熱した泥岩に着目した。これは金木場遺跡など北常陸から陸奥南部の製塩土器分布地域の遺跡で出土しているが、それだけでなく内陸の下野でも出土している。坂本はこの泥岩については藻塩を焼くときに火を受けたもので、灰塩に混入したと考察した。そしてこのようなものはたとえ発掘調査時に遺物として取り上げられたとしても報告書に記載されないのが実情と想定し、今後の調査・整理での注意喚起を行った。

常陸国南部の浮島村で土器を使わない製塩が行われていたとすると、製塩土器を確認しにくい下総国においても同様であった可能性が高い。

佐藤次男は平安時代の『文徳天皇実録』斉衡三年(856)十二月条の記事から、現在の茨城県大洗町の大洗磯前の沿岸において製塩が行われたことを指摘した(佐藤1985)。また先述した常陸国那賀郡酒烈埼若海藻付札にみえる「酒烈」は現在のひたちなか市磯崎町周辺であり、酒列磯崎神社に名称をとどめている。磯崎町周辺は大洗磯前からは比較的近く、地名の音にも共通性がうかがえる。

「酒烈埼」周辺は若海藻の特産地というだけでなく、製塩に関わる藻の採取地の近隣である。あるいは藻の採取地そのものであったかもしれない。この「酒烈埼」周辺でも製塩が行われた可能性がある。この想定が妥当であるならば、先述した「酢水浦」比定地の銚子市清水町周辺でも製塩が行われた可能性がある。清水町周辺は『常陸国風土記』の浮島村にも近い。

ここで東京湾岸の製塩についても目を向ける。濱名徳順は戦国時代の船橋市域で史料的に確認できると考察した(濱名2007)。下総国の官牧である大結馬牧は船橋市意富比神社(船橋大神宮)周辺に比定する説が有力である(吉井2001)。大結馬牧については茨城県常総市大生郷町・同古間木一帯とする説もある。しかし吉井哲はのちの船橋御厨(夏見御厨)の存在および印内台遺跡(道上・栗原1998ほか)の様相などから船橋市夏見付近とする説を第一とした。意富比神社の「意富比」と「大結」の音韻に近似性があること等からも、筆者は吉井の考察を支持する。

馬の飼育には塩が必要であることから、かつて筆者は古代の葛飾郡栗原郷周辺において製塩遺跡が存在する可能性を想定した(糸川2019)。中世に確認できる東京湾(江戸内海)岸における製塩はさらにさかのぼるとみるが現状では古代の発見例がなく、今後の課題である。なお福島正和は平安時代の三陸沿岸における製塩と馬匹生産の関係を考察している(福島2022)。

九十九里浜における製塩はまったく不明であるが、匝瑳郡内陸部における牧の存在や、海浜部における漁撈活動の想定から、製塩が行われた可能性がある。とみる。

石川県珠洲市で現在も行われている揚げ浜式製塩法は砂浜で海水を濃縮するだけであり、アマモでさえも使用していない。この能登における製塩の始まりは慶長五年(1596)と伝えられ、今から400年以上前である。この製塩法は藻塩を焼く製塩法の次段階に位置づけられているが、古い文献には記録が見られないようである。なおこのやり方での製塩は後に残る物証が藻塩焼き法以上に少ないか、あるいはまったくなくても可能である。すなわち土器を使わない製塩は考古学的証拠が乏しいか、まったくなくても実施された可能性があるといえるのである。

岩本正二は、古代の文献に「塩山」・「塩浜」・「塩代田」などが散見されることから、遅くとも7世紀後半頃からは、砂採鹹による製塩が行われたと考察した(岩本2022)。しかし発掘調査による確認は困難であるとも指摘している。

製塩遺跡の確認は困難であるが、製塩遺跡が見当たらないとしても広い意味で「塩」は存在したと想定できる。塩の使用・流通については、物証がなくても状況をみて判断する必要がある。

7 馬匹生産・牧

成田市(旧下総町)名木に所在する不光寺遺跡からは、平安時代前半とみられる1基の井戸状遺構から7体分の馬骨と1体分の牛骨が出土した。馬骨は高齢馬主体である。萩原恭一は不光寺遺跡では多くの若齢馬も飼育しており、馬の飼育が大規模かつ活発であると考察している(萩原1993)。この不光寺遺跡のあり方から、自然放牧の状態ではあるが馬の生産が意図的に行われていると考える。萩原が指摘するとおり、不光寺遺跡は香取郡における私牧のあり方を考える上で重要な遺跡である。

国内の各地に所在する栗原郷を考察した平川南は栗

原郷の多くが国府に近い位置にあり、また馬牛骨の出土から牧的な要素をもつことを考察した(平川2014)。そのなかで下総国葛飾郡に所在する栗原郷もそのような性格の郷としてとりあげられた。葛飾郡栗原郷内には上記の印内台遺跡や、本郷台遺跡(松浦・諏訪1980)があり、馬骨が多く出土した。

下総国匝瑳郡には葛飾郡栗原郷と同名の栗原郷が存在する。匝瑳郡の内陸部に位置する栗原郷においても、現状では考古学的な根拠がないものの、香取郡と同様に牧が存在し、馬匹生産が行われたと想定する。

「牧」墨書について、明治大学日本古代学研究所の「全国墨書土器・刻書土器、文字瓦横断検索データベース」をみると、下総国では山武郡横芝光町神山谷遺跡SI-73A堅穴建物から出土した土師器杯の底部外面に墨書された「□片牧」がある(宮内ほか2002)⁷⁾。神山谷遺跡は旧光町に所在し、匝瑳郡山上郷内の遺跡とみる(糸川2020)。そのほか下総国内では八千代市白幡前遺跡から「牧万」・「牧方」の墨書土器が出土しているが、こちらは牧そのものであるか断定しがたい。

下総国に隣接する上総国では、大網白里市大網山田台遺跡群No.2地点(金谷野A遺跡)と山武市(旧松尾町)大山遺跡から「牧」の墨書土器が出土した。大網山田台遺跡群No.2地点では、H-018A堅穴建物から外面に横位で「浦上生牧」と墨書された土師器杯が出土した(小林・石本1995)。なお「生」と判読された文字は「庄」の可能性があると考える。またその文字の脇の口縁部は打ち欠きされているとみる。そのほかにも口縁部の欠損があるが、打ち欠きされているか断定しがたい。底面から出土しており、墨書土器の出土状況からは意図的に置かれた可能性があるとみる。大山遺跡では、SI-093堅穴建物から底部内外面に「得牧」と墨書された土師器杯が出土した(大野ほか2002)。

8 そのほか 鋳銅遺構—梵鐘鑄造遺構—

○カネヤキ遺跡(江尻1989)

成田市(旧下総町)滑川に所在する。旧鬼怒川水系の低地に面する台地上に立地する。奈良・平安時代では下総国香取郡磯部郷内の遺跡である。焼土と緑色の鋳型片が出土し、報告書では特殊遺構としているが、龍正院の梵鐘を鑄造した遺構である。梵鐘鑄造遺構の時期について、越川敏夫は奈良時代の可能性が高いとしている(越川1997)が、中世以降の可能性もあり、今後の検討課題である。

おわりに

以上、本稿では奈良・平安時代における東総地域の諸生産についてとりあげた。このほかにも馬・牛・鹿などの皮革や干し肉、漆や蘇の生産、また海上郡船木郷の郷名からうかがえる舟の製作や、ひいては木製品一般の製作など様々なものがある。しかし畑作物や布・水産物、また塩そのものなどは地中に遺存しがたいものなので考古学的な痕跡を認めることが難しい。木製品についても低地遺跡ならば比較的多く出土するが、台地上の集落遺跡では概して遺存しがたい。本稿でとりあげた布生産や水産物生産にかかわる資料も、正倉院に伝えられたものや平城宮での出土品であり、在地で出土した資料ではない。また畑作が広く行われているとしても、どのような種類の畑作物があり、どれだけの収量があったのかなどは考古学的には不明な場合が多い。

佐倉市域の集落を考察した小林信一は、主に荒砥として使用された砥石の材質が砂岩製であり、大部分が銚子からもたらされたかと考察した(小林2014)。この砂岩製の砥石について製品そのものが海上郡から提供されたか、あるいは石材のみであったのかは今後の検討課題である。

漁撈活動にしても、ある地域では水田耕作や畑作との兼業であり、ある地域ではほとんど専業であるのかもしれないが、実態は不明瞭である。海洋、淡水、汽水などの違いもある。

土師器焼成遺構については、掘り込みが浅いなど考古学的に把握しがたいとみられ、房総全体でも見つかった遺跡は少ない。そのため現状で知られている数よりはもう少し多く存在したのではないかと想定する。しかしどこにでも存在するというものではなく、ある程度集約的であるとみる⁸⁾。

馬匹生産や牧について、本稿では埋葬遺構の様相や「牧」墨書から若干言及した。筆者は以前、馬や牛と集落とのかかわりについて墨書土器の様相などからとりあげたことがある(糸川2019)。ただし一文字や二文字の墨書文字の場合、特定の性格を付与することは難しい。当時の人々が馬や牛に接していたとしても、牛や馬を含む動物名を人名とした場合などもある。先述した白幡前遺跡の「牧万」も人名の可能性があるので牧に直接かかわるとはしがたい。

牧に関しては、上野国吾妻郡における文字資料を考察した高島英之が「牧」の可能性のある墨書文字をとりあげている(高島2021)。今後房総においても資料

が若干増えるとみるが、現状では数が少ない。本稿で主眼とした下総国においても、牧の比定地や葛飾郡・匝瑳郡内に所在する栗原郷および匝瑳郡山上郷などの周辺地域ではとくに、注意する必要がある。

以上のように生産や生業を考古学的に検討することは難しい。しかし当時の人々が現代まで遺存するものだけで暮らしていたのではないことは当然であり、京進など京とのかかわりもあった。遺存しがたいものの存在をある程度考慮して集落をみていく必要がある。

本稿では奈良・平安時代における諸生産をかいつまんでみてきたが、本来的には個々でも重要なテーマばかりである。また当時の社会様相との関連も考察しなければならない。筆者個人のレベルでは行き届かず、浅い理解にとどまってしまった。とりあげるべきであった資料の遺漏や、目を通す必要のある文献の遺漏も多々あるだろう。

本稿でとりあげたのは主として東総地域の資料であるが、下総において東総以外の地域の様相についても、みていく必要がある。また上総や常陸など周辺国の生産・生業の研究についても、筆者自身の課題とするとともに今後の進展を期待する。

謝辞

本稿の執筆にさいしては下記の諸氏にいろいろとご教示をいただきました。ご芳名を記して感謝申し上げます。

栗田則久 芝田英行 戸村勝司朗 萩原恭一
半澤幹雄（敬称略）。

注

- 1) 報告書からは土師器生産にかかる遺構の数量を把握しがたい。本稿では千葉県内を中心とする土師器生産遺跡を考察した半澤幹雄の見解にしたがった。また妙見堂遺跡の土師器焼成遺構に関する本稿の記述についても半澤の考察を参考とした（半澤1997）。
- 2) 数量は平野功の考察によるものである（平野・平井1994）。
- 3) 戸村勝司朗は多古町に所在する桜宮遺跡の報告書で、鶴舞窯跡群をとりあげている（戸村2006）。鶴舞窯跡群の情報については戸村氏からご教示をいただいた。
- 4) 多古町千田の台遺跡は圏央道にかかる遺跡であり、（公財）千葉県教育振興財団が発掘調査・整理作業を実施した（渡邊ほか2021）。この遺跡の整理作業に携わった萩原恭一氏から、千田の台遺跡においては須恵器甕の外面にタタキをもつものが多く、未発見の須恵器窯からの供給の可能性があるとのご教示をいただいた。千田の台遺跡の近隣に所在する鶴舞窯

跡群は供給窯の可能性がある。なおほかにも未発見の須恵器窯があると想定する。

5) 芝田英行氏のご教示による。

6) 『平安遺文』67号承和八年（841）正月十六日筑前国際。

7) 明治大学のデータベースにおける情報は2023年12月16日時点のものである。なおデータベースではこの資料を上総国としているが、神山谷遺跡が所在する旧光町は匝瑳郡であり、古代においても下総国の遺跡とみる（糸川2020・2021b）。

8) 半澤幹雄氏のご教示による。

引用・参考文献

- 井口崇2022「『賃』考」『千葉文華』第46号 千葉県文化財保護協会
- 糸川道行2019「鳴神山遺跡出土「馬牛…」墨書土器と船穂郷」『研究連絡誌』第81号（公財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行2020「奈良・平安時代における東総の集落と郡郷」『研究連絡誌』第83号（公財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行2021a「奈良・平安時代における東総の交通」『古代』第148号 早稲田大学考古学会
- 糸川道行2021b「東総の主要集落・郡家と郡郷（上）」『研究連絡誌』第85号（公財）千葉県教育振興財団
- 糸川道行2022「東総の主要集落・郡家と郡郷（下）」『研究連絡誌』第87号（公財）千葉県教育振興財団
- 今泉隆雄1998「貢進物付札の諸問題」『古代木簡の研究』吉川弘文館（原典は1978奈良国立文化財研究所『研究論集』Ⅳ）
- 岩本正二2022「製塩研究の現状と課題」『日本列島の人類史と製塩 季刊考古学』別冊38 雄山閣
- 江尻和正1989『下総町内遺跡群発掘調査報告』下総町教育委員会
- 岡本東三1993「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について－その分布の意味するもの－」『千葉史学』第22号 千葉歴史学会
- 大野康男ほか2002『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書 11 -松尾町大山遺跡-』（財）千葉県文化財センター
- 小高春雄1988「東南部地区における古代農業資料」『研究連絡誌』第23号（財）千葉県文化財センター
- 鬼澤昭夫2008「清水入瓦窯跡の確認調査」『香取市内発掘調査概報2』香取市教育委員会
- 鬼澤昭夫2010「清水入瓦窯跡の確認調査」『香取市内発掘調査概報4』香取市教育委員会
- 鬼澤昭夫2011「清水入瓦窯跡の確認調査」『香取市内発掘調査概報5』香取市教育委員会
- 香取市2008「Vol-030 清水入瓦窯跡 古代の瓦窯」『アーカイブ香取遺産』（香取市ホームページ）香取市教育委員会
- 神野信2004「白浜町沢辺遺跡における古代製塩関連資料」『研究連絡誌』第66号（財）千葉県文化財センター
- 黒沢哲郎2004『津宮遺跡群』（財）香取郡市文化財センター

- 越川敏夫1995『岩部遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 越川敏夫1997『龍正院瓦窯跡』(財)香取郡市文化財センター
- 小林清隆・石本俊則1995『大綱山田台遺跡群Ⅱ』(財)山武郡市文化財センター
- 小林信一2014「下総国と印旛郡の成立」『佐倉市史 考古編(本編)』佐倉市
- 齋木勝1987「瓦当范一例-千葉県栗源町コジヤ遺跡出土資料-」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学会
- 齋木勝1998a「コジヤ遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 齋木勝1998b「岩部遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 坂本和俊2015「古墳時代東国の土器を使わない製塩と塩の流通痕跡」『埼玉考古』第50号 埼玉考古学会
- 佐々木由香・バンドリスダルシャン2009「稲荷塚遺跡から出土した炭化種実塊と炭化種実の同定」『四街道市稲荷塚遺跡』(財)千葉県教育振興財団
- 佐々木義則2016「茨城県における奈良・平安時代漁網錘の分類とその用途」『婆良岐考古』第38号 婆良岐考古同人会
- 佐々木義則2020「茨城県における奈良・平安時代漁網錘の地域性(前編)」『婆良岐考古』第42号 婆良岐考古同人会
- 佐々木義則2021「茨城県における奈良・平安時代漁網錘の地域性(後編)」『婆良岐考古』第43号 婆良岐考古同人会
- 笹生衛2012「東国神郡内における古代の神仏関係-香取郡・香取神宮周辺の事例から-」『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館
- 佐藤次男1985「常陸国風土記にみえる製塩」『茨城県史 原始古代編』茨城県
- 須田勉1998「龍正院跡・龍正院瓦窯跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 高木博彦ほか1978『企画展 房総の古瓦』千葉県立房総風土記の丘
- 高島英之2021「墨書・刻書土器の動向から見た古代上野国吾妻郡の歴史的展開について」『研究紀要 39』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 竹内理三編1984『角川日本地名大事典 12 千葉県』角川書店
- 千葉県1996『千葉県の歴史 資料編 古代』千葉県文化財センター
- 千葉県文化財センター1998『『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』
- 土屋潤一郎1983「八日市場市吉田所在の須恵器窯について」『研究連絡誌』第3号 (財)千葉県文化財センター
- 戸村勝司朗1997『多田遺跡群』(財)香取郡市文化財センター
- 戸村勝司朗1998「多田遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 戸村勝司朗2006『桜宮遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 中野修秀・處毅1989『織幡地区遺跡群発掘調査報告書』小見川町埋蔵文化財調査会
- 奈文研2007『奈文研平城宮跡資料館 特別企画展 地下の正倉院展-平城宮木簡の世界Ⅰ 天皇の食膳』奈文研都城発掘調査部史料研究室
- 萩原恭一1993『下総町不光寺遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 濱名徳順2007「戦国時代の地域社会 産業の発展」『千葉県の歴史 通史編 中世』千葉県
- 半澤幹雄1997「関東東部-千葉県内の事例を中心に-」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会 干潟町1975『干潟町史』
- 平岡和夫1978『岩部遺跡-千葉県香取郡栗源町岩部遺跡発掘調査報告書-』栗源町教育委員会
- 平川南2014「古代社会と馬-東国国府と栗原郷、「馬道集団」-」『律令国郡里制の実像』下巻 吉川弘文館(初出は鈴木靖民編2012『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館)
- 平野功・平井真紀子1994『織幡妙見堂遺跡Ⅱ』(財)香取郡市文化財センター
- 福島正和2022「平安時代の三陸沿岸地域における製塩と馬匹生産」『岩手考古学』第33号 岩手考古学会
- 古尾谷知浩2020「布帛の生産」・「地方官衙と手工業」『日本古代の手工業生産と建築生産』塙書房
- 松浦宥一郎・諏訪元1980『本郷台』本郷台遺跡調査団
- 道上文・栗原薫子1998「印内台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 道澤明2006『芝崎遺跡群』(財)東総文化財センター
- 道澤明2010「聖武天皇に献上された麻布」『図説 香取・海匝の歴史』郷土出版社
- 宮内勝巳ほか2002『神山谷遺跡(1)』(財)東総文化財センター
- 木簡学会編1990『日本古代木簡選』岩波書店
- 森公章2013「郡司とは」『古代豪族と武士の誕生』吉川弘文館
- 山路直充ほか1994『下総国分寺跡 平成元~5年度発掘調査報告書』市川市教育委員会
- 山路直充1998「木内庵寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 吉井哲2001「古代房総の牧と馬」『千葉県の歴史 通史編古代2』千葉県
- 渡邊修一ほか2021『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書37-多古町千田の台遺跡(1)』(公財)千葉県教育振興財団